知事コラム　佐竹敬久のさぁ、やるど！

ロシア訪問記

７月１２日から１９日まで、県内の若手の企業人や農業後継者の方々など５０数人でロシア極東地域を訪問しました。

本県に最も近い隣国であるロシアとは、古くから木材輸入や中古自動車輸出などを中心に交易があり、特に本県とロシアの日本海側最大の港町ウラジオストク市のある沿海地方とは５年前に包括的友好協定が結ばれ、これまで農業・医療技術の研修者受入や青少年相互交流、さらには秋田商工会議所とウラジオストク商工会議所など民間レベルでも交流協定を締結するなど様々な交流が続けられています。

今回はウラジオストク市との協定締結５周年を機に、発展著しく、今後のシベリア開発の進展により本県にとっても大きな経済的可能性のある極東ロシアの実態を視察するため、ウラジオストク市に加え、経済面を含む交流合意書を結んでいる極東ロシアの中心都市ハバロフスク州の州都ハバロフスク市、さらには極東ロシアと中央ロシアを結ぶ交通の要衝イルクーツク市を訪問したものです。

多人数のため、ウラジオストク市訪問後はハバロフスク班とイルクーツク班の２班に別れ、それぞれの地で行政関係者や企業人、農業団体等との交流を通じ相互理解と、ビジネスチャンスの発掘に努めました。

ロシア入国は初めての団員が多く、日本とは全くスケール感が異なるシベリアの地に足を踏み入れ、価値観が変わるような感じを受けた人もいたのではないかと思います。

旧ソビエト連邦とロシアという国は同じではなく、旧ソビエト連邦時代は１２の共和国からなる連邦国家でしたが、国家分裂を経てそれぞれの共和国が完全独立し、最も大きなロシアが現在のロシアになったということになります。

ロシアに変わってからは、各州の知事は官選というように国家統制色は残っているものの、経済面ではそれまでの社会主義経済から資本主義経済社会に変わり、大資本家や富裕層も出現し、街には近代ビルディングが建ち、日本の高級車も多く見られるようになるなど、まさに経済面でも大国として君臨するようになりました。

しかし、シベリア地区の開発は緒に就いたばかりで、まさに資源の宝庫ですが、この国と付き合うのは、その広大な大地の如く、気を長くしなければならないのは事実です。

広大な大地が如く、とかく日本人の習性ともいえる、事を急ぐ、結果をすぐ求めたがるという姿勢とは、一般的には次元が異なる世界でもあります。

しかし、これまでの長い付き合いのなかで、少しづつ扉が開けてきたことも事実です。

これまで培ってきた交流の歴史の上に立って、若い世代がもう一押し、飛行機で僅か２時間の秋田と最も近いシベリアでのビジネスの種を探し当ててもらいたいものです。